第13課　わたしは万物を新しくする

【暗唱聖句】

「すると、玉座に座っておられる方が、「見よ、わたしは万物を新しくする」と言い、また、「書き記せ。これらの言葉は信頼でき、また真実である」と言われた」黙示録21：5

【日曜日・子羊の婚宴】

「わたしはまた、大群衆の声のようなもの、多くの水のとどろきや、激しい雷のようなものが、こう言うのを聞いた。「ハレルヤ、全能者であり、わたしたちの神である主が王となられた。わたしたちは喜び、大いに喜び、神の栄光をたたえよう。小羊の婚礼の日が来て、花嫁は用意を整えた。花嫁は、輝く清い麻の衣を着せられた。この麻の衣とは、聖なる者たちの正しい行いである。」黙示録19：６～９

子羊の婚宴とは、キリストが御国をお受けになることを意味しています。その後、花嫁との永遠の生活が御国において始まるのです。ところで、キリストは花婿ですが、では花嫁とは誰でしょう。わたしたちクリスチャンが花嫁でしょうか。確かに「10人のおとめ」のたとえ話では、イエス様の再臨を待望する一人ひとりが花嫁として花婿を待っています。しかし、別の箇所ではキリストの花嫁を個人ではなく、教会や新エルサレムなどに例えています。

「聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために飾られた花嫁のように整えられて、神のみもとから出て、天から下ってくるのを見た」(21章2節)

「夫たちよ、キリストが教会を愛し、教会のために御自分をお与えになったように、妻を愛しなさい」エペソ5：25

つまり、新エルサレムや教会など、そこに属する一つの集団としてキリストの花嫁が例えられています。これは興味深いところです。キリスト者はばらばらな存在ではなく、一つの身体を構成するものとして常に存在しているのです。そして、このような花嫁は輝く清い麻の衣を着て、婚宴の用意を整えます。これは集団ではなく個人個人の問題となります。輝く清い麻の衣とは、もちろんイエス・キリストのことですから、いまこの時、わたしたちはキリストとの個人的な関係をしっかり築き上げていくことが大切です。

ところで、マタイ22章の婚宴のたとえ話では、神の民たちが花嫁ではなく、婚宴に招かれた客として例えられています。これは義の衣を着ているのかがチェックされるためです。礼服を着ていなかった客は外に追い出されてしまいます。これは調査審判と呼ばれるものです。また「この麻の衣とは、聖なる者たちの正しい行いである」とあるので、キリストを着るとき、つまりキリストとの個人的な深い関係が築かれているとき、行いも正しいものとなっていきます。ただ注意したいのは、この衣は着せられるのです。つまり正しい行いとは努力で到達するものではなく、主に委ねきることによって内から生じるものなんだということがわかります。

【月曜日・ハルマゲドンの終わり】

「わたしは天が開かれているのを見た。すると、見よ、白い馬が現れた。それに乗っている方は、「誠実」および「真実」と呼ばれて、正義をもって裁き、また戦われる」黙示録19:11

これはイエス・キリストの再臨の光景です。キリストは白い馬に乗り現れます。キリストは「誠実」および「真実」と呼ばれます。キリストはこの世界を裁かれますが、その裁きは誠実であり真実です。恐怖ではありません。だから、何も恐れることはなく、主の愛に信頼していけば良いのです。

「この方の口からは、鋭い剣が出ている。諸国の民をそれで打ち倒すのである」黙示録19：５

キリストの口から鋭い剣が出ているというのは、神様の裁きは御言葉をもとに行われることを意味しています。だから御言葉に忠実に生きてきたかどうかが問われるのです。聖書をしっかり学び、そして御言葉に生きる。御言葉の真理を軽く考えてはなりません。

【火曜日・千年期】

「わたしはまた、一人の天使が、底なしの淵の鍵と大きな鎖とを手にして、天から降って来るのを見た。この天使は、悪魔でもサタンでもある、年を経たあの蛇、つまり竜を取り押さえ、千年の間縛っておき、底なしの淵に投げ入れ、鍵をかけ、その上に封印を施して、千年が終わるまで、もうそれ以上、諸国の民を惑わさないようにした。その後で、竜はしばらくの間、解放されるはずである」黙示録20：1～3

サタンは千年もの間、底なしの淵に投げ入れられ鍵をかけられて閉じ込められます。これは比ゆ的な表現なので具体的にどのような状況の中で縛られているのかわかりません。ただ重要なのはこれまで神の民を惑わしてきたサタンは、もはや惑わすことができなくなるということ、言葉を換えれば神の民は天において惑わしたり、誘惑したりするものが全くいない世界で幸せに生きることができるということです。

「わたしはまた、多くの座を見た。その上には座っている者たちがおり、彼らには裁くことが許されていた。わたしはまた、イエスの証しと神の言葉のために、首をはねられた者たちの魂を見た。この者たちは、あの獣もその像も拝まず、額や手に獣の刻印を受けなかった。彼らは生き返って、キリストと共に千年の間統治した。20:5 その他の死者は、千年たつまで生き返らなかった。これが第一の復活である。20:6 第一の復活にあずかる者は、幸いな者、聖なる者である。この者たちに対して、第二の死は何の力もない。彼らは祭司となって、千年の間キリストと共に統治する」黙示録20:4～6

神の民たちは復活のあと、千年の間キリストが用意してくださった天国の住まいでキリストと共に生き統治します。その間、祭司となって滅びて行った者たちを裁きます。つまり、なぜ彼らは滅びたのかが明らかにされます。また、神の民が経験する復活について書かれてありますが、第一の復活と表現することで第二の復活もあることを示唆します。第二の復活は滅びていくものたちの復活となり、それは千年期の後に起こります。

【水曜日・新しい天と地】

「わたしはまた、新しい天と新しい地を見た。最初の天と最初の地は去って行き、もはや海もなくなった」黙示録21:1

ヨハネはこの世のときの支配から解放され、永遠のときの流れの中に立ち、新しい天と地を見ています。これは本当に驚くべきことです。そして、もっと驚くべきは、ヨハネが見ているその世界を私たちもやがて見ることになるということです。ヨハネは新しい天と地を目の当たりにして、「今私たちが見ている天と地は消え去ってしまっていることに気がつきます。おそらく、その面影すらない世界なのだろうと思います。その一つの特徴として明らかに今の世界と違うのは、海がなくなってしまったということをヨハネはあげています。海というのは、象徴的に人と人とを隔てるものです。もはや人を隔てるものは必要ないのです。しかし、新天新地ではもはやそのようなものは必要ないのです。まったく新しくなってしまったからです。

また私たちが永遠を生きる世界は、新しい世界です。この新しいという言葉は、聖書の鍵となる言葉の一つです。新しいというギリシャ語はカイロスといって、時間的に古い新しいの新しいという意味ではなく、質がまったく新たになるという意味の言葉です。新しくされたものだけが、この新しい世界に入ることができます。これを難しく思う必要がありません。キリストにあるものなら、誰でも新たにされるからです。「見よ、わたしは万物を新しくする」（黙示録21：5）と主が言われたように、すべてを新しくするのは神様なのです。

「見よ、神の幕屋が人の間にあって、神が人と共に住み、人は神の民となる。神は自ら人と共にいて、その神となり、 彼らの目の涙をことごとくぬぐい取ってくださる。もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない。最初のものは過ぎ去ったからである。」黙示録21：3，4

新天新地には神様の幕屋があり、わたしたちと一緒にいてくださいます。その結果、涙は拭い取られ、死も悲しみも嘆きもなくなります。これはちょうどエデンの園のようです。またラザロが亡くなった時、姉のマルタは「主よ、もしここにいてくださいましたら、わたしの兄弟は死ななかったでしょうに」と言って、キリストがおられる世界には死が存在しないことを知っていましたが、新天新地ではまさにこの告白の通りの世界が待っているのです。

【木曜日・新しいエルサレム】

「『ここへ来なさい。小羊の妻である花嫁を見せてあげよう。』この天使が、“霊”に満たされたわたしを大きな高い山に連れて行き、聖なる都エルサレムが神のもとを離れて天から下って来るのを見せた」黙示録21：9，10

ヨハネは子羊の花嫁である新しいエルサレムが天から下ってくるのを見ます。感動的な光景です。新しいエルサレムの特徴は、神の栄光に輝き、十二の門があり、それらの門には十二人の天使がいてイスラエルの子らの十二部族の名で刻まれています。また城壁には十二の土台があって、それには小羊の十二使徒の十二の名が刻みつけています。この都は四角い形で長さと幅が同じ立方体で、長さも幅も高さも同じ一万二千スタディオンありました。または百四十四ペキスでした。

ここに数字の12、144、12000が出てきます。すべて神様の完全数です。特に立方体は12の辺からできており、１辺が12000スタディオンなので、すべてを合計すると144,000になり、144,000人と一緒になります。新エルサレムは子羊の花嫁とありますが、都が花嫁なのではなく、その都に生きる人々が花嫁として象徴されているのであり、その数が特別な数字である144,000となるのは驚くばかりです。神様の圧倒的なご支配と計画の中で、救いの御業が進行しているのです。

「天使はまた、神と小羊の玉座から流れ出て、水晶のように輝く命の水の川をわたしに見せた。川は、都の大通りの中央を流れ、その両岸には命の木があって、年に十二回実を結び、毎月実をみのらせる。そして、その木の葉は諸国の民の病を治す」黙示録22：1，2

命の木は、エデンの園を思い出させます。ただ善悪を知る木はありません。もはや病気も死のないのだから、なぜ命の木が必要なのでしょう。罪のきっかけとなったこと忘れないため、あるいは神様への感謝を忘れないためかもしれません。また、ギリシャ語には治す（癒す）ということばが幾つかありますが、既にある病を癒すという意味のことばはここで使われていません。いのちを与える、或いは健康を与える、という意味での癒しという言葉がここで使われています。つまりその木の葉は、永遠の御国においては病というのは絶対に入り込む余地がないという事を象徴しているのでしょう。